

## Rogers の人間論

沖田 千里

### 序章

ヴントによる実験室が 1879 年に設置されたことに端を発する心理学は、現在の学問体系で哲学とは区別されている。文献学的には古代アリストテレスの『デ・アニマ』を心理学の起源とみなす立場はあり、その指すところは魂論のようなものであり現代で語られるところの心理学とは異なりながら、古典の中でも例えばカントの『純粹理性批判』（初版 1781 年）にも *Psychologie*（心理学）という言葉はすでに登場している。それでもなお敢えてヴントの実験室が心理学史の端緒とされているのは、やはり心理学が経験的なエビデンスを重視する「心の科学」を目指しているからであろう。しかし、そうして「心の科学」が萌芽したのちの心理学者の中でも、フロイトに始まるいわゆる精神分析学者は哲学史上にも変わらず記述が見受けられ、現代においては自然科学に包摂されている心理学と、思想としての色彩の強い人文学の一種である哲学に接点が全く認められていないわけではない。19 世紀以降に学問体系が専門的に細分化されていった史実を背景としてか、精神分析以降の心理学者については哲学史上にあまり記述が見受けられないが、哲学史から外れて以降の心理療法理論を概観すると、精神分析理論にアンチテーゼを打ち出しているものもある。その一つが、本研究で出発点とする C. R. Rogers の人間性心理学である。

Rogers は精神分析理論を第一勢力、行動主義心理学を第二勢力として批判し、自身の提唱した *Person Centered Therapy*（以下 PCT）を第三勢力として位置づけている。PCT にて掲げられたセラピストの態度は現代に主流な心理療法理論に多く吸収されているが、PCT に関する研究は国内では心理学の領域で臨床事例や実証的な見地から盛んになされている一方で、文献解釈の視点からの概念化は十分になされてこなかった。そのような事情を踏まえ中田（2013）は、我が

国での PCT 研究においてセラピストの具体的な努力などを含めた言語化・概念化が検討課題であると指摘している。理論的な次元を丁寧に扱うことのできる基礎研究の領域で PCT の理論を再読して綿密な概念化を進めることに与し、そしてそこから哲学に通ずる示唆を汲み取ることが本研究の目的である。

人間性心理学の理論はケアの倫理を扱う応用哲学や社会言語学の談話分析などにおいて再読されることもしばしばあるが、学界で主要な位置を占めているのはやはりセラピストを兼ねた臨床心理学者であることに変わりはない。例えば教育学の領域であれば現場の経験の有無に関わらず基礎研究は可能であり、法学も現場の弁護士でなくとも法解釈は研究対象となり得るが、臨床心理学の理論構築、そしてその解釈が主にセラピストの視点でなされていることはこの領域の特徴であると思われる。どれだけ主観を排除しようとも、人間である限り自己を起点として他者や世界を眺めざるを得ず、セラピストが一切の自己を棚上げして心理療法理論と向き合うことは不可能だろう。訓練の一環として教育分析の場に出向きクライアントになることがあっても、研究はセラピストとして進めていく。

例えばセラピストである井上（2003）は「何かをつかみたくてクライアントに」なり、「ことばにならないからだの感じをそのままきめ細かく、丁寧に受け取ってもらうことを人は求めていることを実感」したと述べており、この感想は後述する Rogers の心理療法観と一致している。しかしこれのみでは体験談の域を出ず、こうしたメカニズムを Rogers の言葉を紡ぎながら再考をしていく必要がある。本研究では Rogers を出発点としながらも、個人の臨床経験に左右されることなく現場のセラピストとは違う視点で新たに解釈を進めていきたい。

### 建設的なパーソナリティ変化の条件

Rogers の思想は次の記述にその全体像がよく表れているが、人間の本性への基本的な信頼、そして他者との接触を通して肯定的なパーソナリティ変化が起こるという人間観が見て取れる。

人間は基本的にポジティブな方向性を持っている。深く混乱している人、

ひどく反社会的な行動を取っている人、とても異常な感情を持っている人、このような人々と私の深いセラピー接触の経験からでもこのことがいえるのである。私がそのような人々が表現している感情を敏感に理解でき、一人の独立した人間として受容できるとき、彼らはある方向に向かって動いていくのである。〔(中略)〕私が最も事実を表していると思う言葉は、ポジティブ、建設的、自己実現への動き、成熟や社会化への成長、といったものである。人間は十分に理解され受容されるほど、処世のために被っていた仮面を脱ぎ捨て、前向きの方角に動いていくようになる。(Rogers,1961a [1961b])

これは Rogers 自身の「深いセラピー接触の経験」から編み出された人間観であるが、Rogers はそのような自他の接触関係を通して建設的なパーソナリティ変化が起きるためには、次のような諸条件がしばらくの期間にわたって存在する必要があると述べている。

- (1) 2人の人が心理的な接触をもっている。
- (2) 第1の人(クライアントと呼ぶ)は不一致(incongruence)の状態にあり、傷つきやすく不安な状態にある。
- (3) 第2の人(セラピストと呼ぶ)は、その関係の中で一致しており(congruent)、統合して(integrated)いる。
- (4) セラピストは、クライアントに対して無条件の肯定的配慮(unconditional positive regard)を経験している。
- (5) セラピストは、クライアントの内的照合枠(internal frame of reference)を共感的に理解して(empathic understanding)おり、この経験をクライアントに伝えようと努めている。
- (6) セラピストの共感的理解と無条件の肯定的配慮が、最低限クライアントに伝わっている。(Rogers, 1989 [1957c])

(3)の一致性、(4)の無条件の肯定的配慮、(5)の共感的理解は Rogers の中核条件として臨床家の間で周知されている。本稿の課題は、(6)にてクラ

イベントに伝わることが求められている（４）と（５）の言語化を試みることである。

そして Rogers (1989 [1957c]) は上記のような条件を通してあらゆる状況に適用可能な条件を提案することを目指しており、セラピーで起こる関係を日常生活における他の人間関係とは異なる特殊な人間関係であるとも考えていない。例えば、よい友人関係もこれらの条件を満たしているという。Rogers (1961a [1957b]) はさらに、セラピストがクライアントと科学者のごとく研究対象として関わるのではなく人間対人間 (a person to a person) として関わり、というコンセプトも掲げており、この理論は心理臨床の場面に限ることなく応用を試みることは可能であると思われる。したがって本稿では Rogers の掲げる態度を一つの人間論に発展可能なものとして読み解き、建設的な自己と他者との在り方について考察していく。

### 無条件の肯定的配慮

まず、既に記した（４）の無条件の肯定的配慮について見ていく。Rogers (1989 [1957c]) によると、「セラピストがクライアントの経験しているあらゆる局面を、そのクライアントの一部として温かく受容しているという経験をしているならば、その受容している度合いだけセラピストは無条件の肯定的配慮を経験している」。つまり、「受容について何の条件もついていない」ということである。受容とは「相手の人がありのままであることに対して心からの喜びを感じる」ことであり、それは「相手が現在感じている気持ちや現在取っている態度そのもの、あるいは相手が現在の姿そのものであることに喜びを感じている」ことである (Anderson & Cissna, 1997)。

この態度はクライアントの言動の善し悪しを価値判断しないという「非審判的姿勢」との深い関連が例えば岩壁 (2013) によって指摘されているが、この概念は Rogers 自身が使用したものではなくマニュアルで技法化される際に流布したものであるため、Rogers のテキストを踏まえ言語化する必要がある。この「非審判的姿勢」と無条件の肯定的配慮との関連について、次のような疑問が生じ得るだろう。肯定的配慮と名付けられているにも拘わらず、何故クライ

エントやその語りを受容するに際して肯定判断をも下さないという姿勢が求められているのか。また、肯定判断もしないということと、肯定的な配慮をするという態度はどのようにして両立するのか。そしてセラピストは受容の度合いだけ無条件の肯定的配慮を経験するというが、肯定も否定もしないという可もなく不可もない態度で、真にクライエントを受容しているといえるのか。これらの疑問点を以下に再考していく。

肯定的な評価をすることに関して Rogers (1989 [1958]) は、次のように述べている。

肯定的な評価も、長い目で見れば否定的な評価と同様に脅威となる。何故ならば誰かに良いと言うことは同時に、自分が『良くない』という権利をも持つことを伝えるからである。

セラピストが肯定的な評価をも控えるのは、クライエントに否定的な評価を下す権利をほのめかさないためであることが上記の引用から窺える。セラピストがクライエントに肯定的な評価をも伝えないことは、いかなる条件下でも否定することはないという態度表明なのだろう。セラピストがクライエントに肯定的な配慮を経験しているのならば、そこに肯定がないはずはない。しかし否定する権利をほのめかさないためにこそ、肯定判断を伝えない。セラピストの内側に肯定が存していても実践的には肯定の言葉を伝えないことこそが、肯定的配慮における「非審判的姿勢」の意味するところだと考えられる。

Rogers (1989 [1957c]) によると無条件の肯定的配慮は「選択的に評価する態度とは正反対のもの」で、『『良く』、肯定的で、成熟して、信頼できる社会的な感情の表現に対してと同様にクライエントの『悪く』、苦痛に満ち、恐れており防衛的で、異常な感情の表現を受容する感じを含むもの』である。それは「もしあなたがこのようにあるならば、あなたが好きである」のではなく、また「あなたはこんな時は良いが、こんな時は悪い」というものではない。選択的に評価しないこと、すなわち否定という選択肢を排除することこそが、肯定的配慮の無条件性を保証するのである。

Rogers (1989 [1957c]) は無条件の肯定的配慮を測定する項目として「クラ

イベントにもその話す内容にも、是認したり否認したりする気持ちは起こらない」、「クライアントの話す内容について判断を下す気はない」というものを挙げており、一瞥するとセラピストはクライアントの語りに対して肯定をもしていないように思われるかもしれない。しかしそれはクライアントの語りを選択的に肯定することを控える態度が表されているのであって、無条件の肯定的配慮は否定という選択肢の対極にある肯定ではない、と同時にある条件下では否定に変わりうる判断ではないことを意味している。したがって、無条件の肯定的配慮をなすことにおける「非審判的姿勢」は肯定しないという事柄を表すのではなく、決して否定をしないことの表明であり、否定という選択肢の排除された暗黙の肯定なのである。

### 共感的理解

次に、(5)の共感的理解について見ていきたい。岡村 (2010) は共感的理解と共感の概念を区別し、共感は「理解のための様式」であると述べる。Rogers (1989 [1957c]) によると共感においてはセラピストが「クライアントの私的世界をあたかも自分自身の世界であるかのように感じとり、『あたかも……のごとく』という性質 (“as if” quality) を決して失わない」ことが求められている。この “as if” quality とは「クライアントの怒りや恐れや混乱をあたかも自分自身のものであるかのように感じ、且つそこに自分自身の怒りや恐れや混乱を巻き込ませていない」ものであり、後年の Rogers はこの定義を次のように振り返っている。

その個人が感じるかのように痛みや喜びを感じ、彼が見つめるかのようにその理由を知覚する。もちろん、彼が傷ついているようにという認識を失ってはならない。この『あたかも……のように』という特性を失うならばそれは、単なる同一視にすぎない。(Rogers, 1995 [1980])

先の定義では他者の感じる事が自分自身のものであるかのように、という意味での “as if” quality となっているが、後の定義では他者が感じるように、とい

う意味での“as if” quality となっており、彼自身の振り返りにおいてその指すところが不正確な部分はある。しかし、セラピストがクライアントの内的世界へと入り込む共感においても自己と他者の境界が意識されていることに変わりはない。セラピストがクライアントの行動を受容することは「自分とは別個の (separate) 一人の人間として自分自身の感情や経験を持つことをゆるされている人間として、好きである」こととされ、受容する瞬間が次のように描かれている。

相手の人 [クライアント] が自分自身の経験している事をどのように受け取っているかということ、すなわちその人の経験の受け取り方を正確に見ることができ、真に彼の立場に立って見ることができる [(中略)] しかもその際に私 [セラピスト] 自身の人間性や独立性を失わない。さらに私の側から言うと、クライアントすなわち私と対面している人は、私のそのような態度をいくらかでも感じ取ることができる。(Anderson & Cissna, 1997)

これは共感的理解という態度の定義と重なっており、(4) と (5) の態度は不可分のものであることが確認できる。そして Rogers (1961a [1961b]) は「我々は他者の言葉を聞いた時、それを理解するよりもすぐに評価し断定してしまう [.....] 彼の言葉が彼自身にとってどのような意味があるのかを正しく理解しようとすることはほとんどない」と述べ、また共感を「一時的に他者の生活に入り込み、判断を停止して微妙に動いていくことを意味する」としており (Rogers, 1995 [1980])、理解を目指して共感をなすにあたって「非審判的姿勢」が求められていることが窺える。

無条件の肯定的配慮における「非審判的姿勢」は、選択的にクライアントやその言動を評価することを控え、決して否定をしないことを意味していた。それはいかなる条件下でも肯定することの表明で、肯定的な配慮の無条件性はそのような形で保証されていた。一方で共感をなすにあたっての「非審判的姿勢」が意味するところは、無条件の肯定的配慮におけるそればかりではないことが上記の文から窺える。ここでは正確にクライアントを理解しようとするからこそ、評価を棚上げするのである。「共感の最高の表現は受容することと評価しな

いこと」であり、それはセラピストがクライアントを批判的に見ていると、クライアントの内的世界を正確に知覚することが出来ないからである (Rogers, 1995 [1980])。無条件の肯定的配慮において肯定が存しているように、共感をなすにあたってやはり「批判しない」という姿勢に重点が置かれており、共感的な理解ができた時にはクライアントへの肯定がある。(4)と(5)の二つの態度を実現するにあたって求められる「非審判的姿勢」は、実践的にはセラピストがクライアントに肯定判断も否定判断も伝えない態度を意味するが、その辿り着くところはクライアントへの条件なき「肯定」なのである。

### Rogers の共感と Smith の同感

Tengland (2001) が共感的に理解することを Shlien (2001) の定義する sympathy と同様のものであると述べているように、共感 (empathy) と同感 (sympathy) とで原語・定訳は異なるものの Smith が『道徳感情論』において提示した同感概念は、Rogers を読み解く上で示唆に富んでいる。Rogers は理解に先立つ共感という行為において、セラピストが自分自身の感情を巻き込ませないという “as if” quality を求めているが、Smith は我々が他者の境遇へと入り込んで同感へと至るメカニズムに関して次のように述べている。

我々は他者が感じることを直接に経験しないのだから、我々自身が似たような境遇でどう感じるはずであるか、ということ想起する以外の仕方では彼らがどう感じているかを思い描くことは出来ない [……] 我々の諸感覚について我々は、想像力によってしか何ら概念を形成することが出来ない [……] 我々の想像力が映すのは、彼ではなく我々自身の諸感覚の印象にすぎないのである。(Smith, 2006[1759])

ここで Smith は他者への同感において自分自身の諸感覚がもとなることを指摘しており、一見 Rogers が言うところの “as if” quality とは相容れないように思われる。しかし、セラピストがクライアントの諸感覚と「似ないものでもないもの」(Smith, 2006 [1759]) を自分自身の中に見出すという働きが、彼自身

の独立性を保証するのではない。確かにセラピストが真にクライアントの立場に立ってクライアントを理解するには、自分自身の感情や判断を棚上げしなければならない。しかしセラピストはクライアントとは異なる人間である以上、クライアントの内的世界を理解するうえで彼自身の感覚を手掛かりとしないわけにはいかない。クライアントが感じているかのごとく、という “as if” quality におけるセラピストの独立性は、Smith が指摘するような同感のメカニズムに裏打ちされていると思われる。

また Smith は、状況の理解と同感との関係について次のように述べている。

怒った人の凶暴な行動は我々を彼の敵に立腹させるよりも、彼自身に対して立腹させがちである。我々は彼を怒らせたものを熟知していないのだから、彼の立場から明白に理解することは出来ず、それが引き起こす諸情念と少しでも似たものを思い描くことも出来ない。その代わりに我々は、彼が怒りを向ける相手の人々の境遇がどうであるかということ、そしてそれほどに激怒している敵からどんな暴力に晒され得るかを明白に理解する。従って我々は彼らの恐怖や憤慨に容易に同感し、彼らをそれほどに大きな危険に晒しているように思えるその [怒って凶暴な] 人に反対する立場に直ちに立つのである。(Smith, 2006 [1759])

すなわち、凶暴にふるまう人の怒りの原因を熟知・理解できない場合は同感できないという。Rogers はクライアントを正確に理解するために共感することをセラピストに求めたが、Smith は明白な理解ができないものに対して同感できないと指摘する。この点で両者は正反対の見方を示している。この相違点が生じる背景として Rogers は第一義的にはセラピーの場を想定しているのに対し、Smith は日常的な場面を想定していることが挙げられるが、Rogers が共感を理解に先立てるものとしたことは配慮の無条件性にも繋がっているだろう。何故なら、状況を明白に理解できない場合に共感が実現されないならば、共感と連動すべき受容が条件付きのものになってしまうからである。明白に理解できないならば共感しない、という様式は Rogers の提示したものと相容れない。「理解の様式」としての共感は、理解の正確さを追求するものであると同時に無

条件の肯定的な配慮との連動を可能にしていると思われる。

### 自己から他者・世界へ

Rogers のアプローチはその中期に「クライアント中心」と形容されていたように、クライアントの内在的見地が重んじられているような印象を受けるだろう。例えばアメリカの心理学者である Schultz はそのような Rogers の理論に対し、次のように述べている。

この理論は、個人が利己主義で身勝手な状態にいるよう勧めているかのようである。自分のために経験し感じ十分に生きることの強調が、愛情や献身や義務——「私に (me)」および「私の (my)」各瞬間の新鮮な経験以外の原因や目的や人に対する義務——と両立していない。この健康な人格に関する見方は、他者や社会に対する配慮と責任のある積極的な関係性についての感覚を欠いている。[Rogers の考える] 完全に機能している人間は世界と交流し責任を持つ参加者ではなく、世界の中心にあるように見える。関心は自分自身の存在にのみあり、他者の成長や発達を促しはしない。(Schultz, 1977)

Rogers の理論はこのように、自分本位で主観に閉じこもる人間観として批評されることもある。あるいはクライアントが現時点でどうであろうとセラピストが無条件の肯定を経験することで本当に人は変われるのか、という疑問も起こり得るだろう。しかし Rogers の目指すところは現状を肯定し、クライアントを変化から遠ざけることでもなく、自己への執着に止めることでもない。Rogers はセラピーを施した際に観察されるクライアントの方向として、例えば次のようなものを挙げている。

クライアントは自分自身の経験を受け容れることができるようになるにつれ、他者の経験も受け容れることができるようになる。クライアントは自分自身の経験も他の人びとの経験もそれが何であれ、あるがままに双方

とも価値づけ、承認する。(Rogers, 1961a [1960])

セラピストによってもたらされるクライアントの自己受容の先にあるものは、他者受容であることが分かる。クライアントの関心は内在的なものに向き続けるのではない。「あるがままの自分を自分で十分に受容するまでは変化することもできず、現在の自分と違う方向に動けない」が (Rogers, 1961a [1961b]), 「人は正確に理解された体験を得ると自分の経験をより広がった視点から見つめ始め」る (Rogers, 1995 [1980])。一瞥すると Rogers の理論ではクライアントの内面にセラピストが波長を合わせ、彼を世界の中心におくように映るかもしれない。しかし、その目指すところは主観的見地から客観的見地へと向かうこと、自己受容から他者受容へと向かうことなのであり、他者であるセラピストからクライアントの自己が受容される体験は、今度はクライアントから他者へと開いていくはずである。

## 結論

本稿で確認したセラピストの無条件の肯定的配慮、そして共感的理解の行き着くところはクライアントへの肯定であった。そして実践的にこれらの態度と絡む「非審判的姿勢」の意図するところは、肯定も否定もしないということではなくむしろ批判をしないということであり、その辿り着くところもまたクライアントに対する肯定であった。それは単なる治療の手段や技法に止まるものではなく、むしろセラピストがクライアントを人間として「尊重する」(Rogers, 1989 [1957c]) 証なのであろう。セラピストがクライアントを受容した時に「真の人間と人間の出会いを経験しており、そのような出会いの中で我々は相互に変化する」(Anderson & Cissna, 1997)。このような相互に変化を与える人間対人間の交わりは、Rogers の目指す自他の建設的な関係性なのである。

そして共感的に理解し受容するということは数ある精神療法理論のなかでも、他者としてのセラピストの存在意義を保証するものではないか。「クライアントは他人に依存しなくともある程度は [.....] 否定され、抑圧された感情を発見することができるが、そのような感情を情緒的に十分に受容することは自

分の力だけでは出来ない」と Rogers (1989 [1957a]) も述べている通り、経験を共に感じ受け容れるということは、単独では出来ないからである。

Rogers の提示する態度が後の心理療法理論に多く吸収され得た一つの理由として、セルフヘルプの限界を超えた他者の役割を打ち出したことが挙げられるだろう。Rogers は自らの提唱したアプローチを初期に「非指示的」と形容していたが、セラピストが積極的に指示を出す他のアプローチにおいても、他者としてのセラピストがこのような態度を維持することは建設的なパーソナリティ変化を起こすうえで必要条件となるのではないか<sup>1</sup>。ここにこそ、特定のアプローチに限られることのない Rogers の理論の発展可能性が垣間見られると思われる。

## 註

- <sup>1</sup> 例えば現代に主流で米国の臨床にて唯一保険の対象とされる「認知行動療法」においても、セラピストの態度として Rogers の中核条件は前提とされるが (伊藤 2013)、習熟していないセラピストが陥りがちな誤りの一つとして、こうした治療関係の軽視が指摘されている (井上 1997)。

## 参考文献

- Anderson, R. & Cissna, N.K. 1997 *THE Martin Buber—Carl Rogers DIALOGUE —A New Transcript with Commentary—*. New York: State University.
- 井上和臣 1997 「アルコール乱用の認知療法」岩本隆茂・大野裕・坂野雄二 (編)『認知行動療法の理論と実際』培風館 207 - 215 頁.
- 井上澄子 2003 「カウンセリングとフォーカシング——フェルトセンスに触れることの意味」村山正治 (編)『ロジャース学派の現在』至文堂 175 - 183 頁.
- 伊藤絵美 2013 「認知行動アプローチ②——臨床の実際」岩壁茂・福島哲夫・伊藤絵美『臨床心理学入門——多様なアプローチを越境する』173 - 192 頁.
- 岩壁茂 2013 「ヒューマニスティックアプローチ②——臨床の実際」岩壁茂・

- 福島哲夫・伊藤絵美『臨床心理学入門——多様なアプローチを越境する』  
有斐閣アルマ 131 - 152 頁.
- Kant, Immanuel 1998 (1781) *Kritik der reinen Vernunft*. Hamburg: Felix Meiner Verlag.
- 中田行重 2013 「Rogers の中核条件に向けてのセラピストの内的努力——共感的理解を中心に」『心理臨床学研究 第 30 巻第 6 号』日本心理臨床学会 865 - 876 頁.
- 岡村達也 2010 「治療的人格変化の必要十分条件——理解すること」岡村達也・小林孝雄・菅村玄二『カウンセリングのエチュード——反射・共感・構成主義』遠見書房 11-27 頁.
- Rogers, C.R. 1957a A Note on “The Nature of Man”. Kirschenbaum, H. / Henderson, L.V. eds. 1989 *The Carl Rogers Reader*. London: Constable. pp. 401-408.
- Rogers, C.R. 1957b A Therapist’s View of the Good Life: The Fully Functioning Person. 1961a *On Becoming a Person*. New York: Houghton Mifflin Company. pp. 183-196 = 2013 ロジャース (諸富祥彦ほか訳)『ロジャースが語る自己実現の道』岩崎学術出版社.
- Rogers, C.R. 1957c The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change. Kirschenbaum, H. / Henderson, L.V. eds. *The Carl Rogers Reader*. pp. 219-235. = 2001 ロジャース (H.カーシェンバウム・V.L.ヘルダーソン編 / 伊東博・村山正治監訳)『ロジャース選集 (上) カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文』誠信書房.
- Rogers, C.R. 1958 The Characteristics of a Helping Relationship. Kirschenbaum, H. / Henderson, L.V. eds. *The Carl Rogers Reader*. pp. 108-126. = ロジャース (H.カーシェンバウム・V.L.ヘルダーソン編 / 伊東博・村山正治監訳)『ロジャース選集(上)カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文』.
- Rogers, C.R. 1960 To be That Self Which One Truly Is: A Therapist’s View of Personal Goals. *On Becoming a Person*. pp. 163-182. = 1967 ロジャース (村山正治編訳)『ロジャース全集 12 人間論』岩崎学術出版社.
- Rogers, C.R. 1961b “This is Me” The development of my professional thinking

- and personal philosophy. *On Becoming a Person*. pp. 4-27. = ロジャース (村山正治編訳) 『ロジャース全集 12 人間論』.
- Rogers, C.R. 1995(1980) *A way of Being*. New York: Houghton Mifflin Company. = 2007 ロジャース (島瀬直子訳) 『人間尊重の心理学——わが人生と思想を語る』 創元社.
- 佐治守夫・飯長喜一郎 (編) 2013 (2011) 『ロジャーズ クライエント中心療法 [新版] ——カウンセリングの核心を学ぶ』 有斐閣.
- Schultz, Duane 1977 *Growth Psychology: Models of the Healthy Personality*. New York: D. Van Nostrand Reinhold Company. = 1982 シュルツ (中西信男・古市裕一訳) 『健康な人格』 川島書店.
- Shlien, John 2001 Empathy in Psychotherapy: Vital Mechanism? Yes. Therapist's Conceit? All too Often. By itself Enough? NO. Haugh, S. / Merry, T. eds. *Empathy*. pp. 38-52.
- Smith, Adam 2006 (1759) *The Theory of Moral Sentiments*. New York: Dover Publications. = 2010 スミス (水田洋訳) 『道徳感情論 (上)』 岩波文庫.
- Tengland, Per-Anders 2001 Empathy: its meaning and its place in a theory of therapy. Haugh, S. / Merry, T. eds. *Empathy*. pp. 72-85.